

中村俊定文庫  
文庫 18  
721







此露の音は何と申の中はれは是も一に  
 ありては我は阿婆の如く一は家も  
 人となりては我は官津の隠きも白虎園の俳諧  
 了風流をよと書きて正風の奥文と極め貞原の古  
 詩を棧雲の流行と探り月を情とて山田  
 形を録するは是極の重きを志すなり一は遠く我を  
 道と見し芝隈連は春の年心なり一は  
 修の更と膝の依中をよと書くは曲老を語らぬ  
 実の天理と誠偽の人の理なり一は下は  
 改は極極也





隆平里に道ありて杖家の別号二代の飛騨園と云後  
修りて滅す蕉門俳士の龍歌とありき此の遠近地師の  
凡そ此史の能徳を慕ひ俳諧隆を行はせし由縁を  
おれたる針界も尚の如徳を得たりと其名世に  
傳りて此の深妙の如く佛の徳の如きと云ひし  
五年もをたせしものありて徳の如きと云ひし  
とに戒を文致し給ひて名利を愛着せん事と云れ  
る此物也と出聲を仰ぐ歎め且も暮る小種を傳  
るやうに佛の徳を留めて忘るす殊更中南を伝る河

と隆平と云ふは世に善果を植ふものなりと云ふ  
突也之善果の限らざるは年膳月の来れり日予の草  
庵に植ひしる不筑波の如くけ事の高くと障を來  
しれ損をばしつなきを植むけし折るも一に  
雪の上は寒師の服層をばしつか地をさすことと云  
の事なりしより例の新もきふ此二觴二詠の興と云  
く急き事をする衣であらうては定まらぬと云ふ  
士は肩をわゆる額をさすも佛般日何と漸定尔と額  
の折るも此の極善の頂神なる馬と云ふや



屏庵のしん新を是不見送り別れり是は母の言  
のしんあや室師の系力具妻之疾大胸膈之患  
を食をなすて病床に却り此親族の天に祈り佛神  
を祈り門人の徒に乞ふ暫く立たり夜を日と床を離れ  
仰り白糸庵の師に命を枕と仰けり病中の吟を多し予ハ  
日と不訪や膝で診せ密秘とらうとも頼みかき病  
を治るる室中此人の叫を涙をみれば夜を月を斯く  
早月の如くあや乞の祈りあけりはなれり一神  
をうらむ室師の言を記庵に水とていひてやると有り  
る此の言を大悟の例をうらむ各胸をわきわけて力あり  
筆をなす此の祈り常の端を記出の田舎の言を  
仰けり師の病眼をうらむ真迷の言を我死を急ぐ余を  
書を如く秘書と評する一句を授けり其後合眼を  
掛る侍を眠らぬ如く後生遠近に如く嗚呼けり  
う病を九族の歎き叫ぶの悲し紅涙を流むるも甲斐  
ありそき體を東禪杖をよき非区七日の御延を  
かき各悼志の言を授けり自ら言て日と有りこれ  
新の室師の言をうらむ碑前を燒き一他を追福の言を











身も涼や其曉のはやうもあ

山サキ

宗巴

秋のきつ経も鳥はわすれや

斤子

報々

六月のあけにうきを佛

安久山

空居

蝶もを心懐もくうり此秋かろを

日

一聲

橋や空を流してをよあや

日

兔什

名月やせせりあきぬ神が

次浦

兔也

香拾ふ秋もを思ひくさる

舟越

百川

種河れがくも暖り秋の神

吹入

素東

お方さえて流るるあやを利のむ

殿部田

紫桂

アそあはしとんこゆわ

わえりぬを思ひつぎ

秋のきつ経も鳥はわすれや

作い海を流さる一はきりのきき

六月のあけにうきを佛

阿の透戒耳を初て夏のはきり心は口でかろふ

あきりうきを巴の経とくゆきやう

蝶もを心懐もくうり此秋かろを

阿の秋とあきりうきを世と魚ひくきとあき

こきと悔の唯送章を悠吹うき

古作の白月名月ありうきを

お腹くうきとあきりうきを

名月やせせりあきぬ神が

あきりうきを月をうきを二指の流さる

あきりうきを月をうきを二指の流さる

香拾ふ秋もを思ひくさる

阿の秋とあきりうきを世と魚ひくきとあき

こきと悔の唯送章を悠吹うき

種河れがくも暖り秋の神

阿の秋とあきりうきを世と魚ひくきとあき

こきと悔の唯送章を悠吹うき



抄る珠粒を白ひの末し美きなり  
ま路ば白き人小葉とり守  
他くくくくくくくくくくく  
ふ蓮や依のまあれおくも咲き  
あふ依く月かえりや境の前  
きりの雲路をわらわすまき上  
社母ふは後なるあつて日  
啼く鳥やきくくくくくくく  
あふ葉やむくくくくくくく

成田

素直

蓬月

意月

左株

草草

春光

其友

思道

里挑

踏るくも美提の持やまのま  
一帯あともくくくくくく  
作れんあめあるわくく  
折枝の揺濺くや柳の露  
あふ葉やむくくくくくく  
あふけの朝露を消く思く  
紫乃雪をくくくくくく  
あふくくくくくくく  
其思ひ社を裁枝の産意く

内山

飯高

霞夕

柳枝

野蹟

裁路

汀砒

九花

楚柳

一蓬

蘭岳



伊の左とてや平路の碑一り光り

方田

兔眠

指のれはもひりささしあけ

飯塚

三路

音由來の跡志何れをさり塚の虫

潮左

こぼりて於其色深ふまき雲の

扇車

詣てまわし首をさすもくわりの

次浦

文曉

西人跡沙を越平の客の流るる

之厚

伊や尾越の跡れわりの

麴馬

一雨のふり来り入るるもあけ

向國

とらふあはさす夜秋のそよぶ

風夕

稲書る物もく海を隔り

斗牛

魚の黒い草やたのく法の花

南斗

秋咲く西山光る多都の

湖南

朝毎るあや運を思ひ出

積水

けり於て赤紅の色をさす

残虹

君香に葉をさす秋の風

小三倉

履色

迎の火や我もさす秋の

沢

文竜

名の神に秋をさす秋の

荒北

圮橋

あけり一秋風る水の色

岩部

露井















蓮の字の能て花極まふ事也

三見来も電を月と月此志也

書物一扇をえん句を是とし

華ふ露の流世の色をさるる也

文書より流る付也 月の令

一筆をえん情を人の目につく

柳の枝を折折して啼く也

句は評も絶句と軽む月解ふ

月や雲をよみればさるる也

秋風やぬるるるるるるる

柳てあつたまふ流れきり

船書れけや流るるるるる

雪のあややあやあやあや

拾つてもの子ぬ阿字れも

山屋をよみ裁しおのま

寂光れ月の来やと胡の

中より秋の来やと又と

さるる事きりの来やと

吉田 卧定

梅童

箕風

雲調

童背

梅朝

梅星

花雲

梅守

梅替

花兄

柝志

文雪

斗流

朝山

雀嘴

隣文

泊雅

吉田

龜崎

久方

二又

高田

水戸



長きや非情乃本としそ路付白 山中

麴車

碑の下の鐘はういさうちのそ

斗明

ふら此日おこさやし石のそ

池月

そらこらるる中らいあゆみ

市交

お路を急ぎ歩しそ雲の夕下

可卜

あけそらしそあうれて秋の條

牡旭

まゆみゆりそまきんうしそあけ

里暁

そ海一歩せしそ海行しそ

夏柳

八月の船の海おこしそ

里月

入らそそ船をいそ名は蓮下り

山壽

れりしそ旅やを理よ中のみ

都曉

そ月をそあやそあまのそ

泥荷

何のそをそまて海をの月を

其葉

あそそあそはそあそそ月を

一笑

そらそをそあそいそそそ

何香

蓮のそをそあそいそそそ

魯風

際やそあそいそそ月を

共和

八月のそあそいそそ

秋雪

〇

十二



常河右方抄御もや月うけそえやうと其凡鹿の  
あまのいづこくく之をくれのりいなる道君一侍のぬ

胡也く風もそ家一郭一と

中和軒

秋のそれもくぬま時とくありお

津宮

雄都

弦の空も流の種もや秋の柳

駒井野

李曉

初陽の何の世れ時とくあやを

柳交

夜と空もあやとあやを

兩松

鶯のや石下のもくれもあや

有隣

忘れぬるもあやとあや

可東

るもあやとあやとあや

烏暗

名もあやとあやとあや

宝田

窓林

あやとあやとあやとあや

寺基

夕夕

美空もあやとあやとあや

上福田

文調

暎の空の飛や西田もあや

雨好

極もあやとあやとあや

芳瓜

月もあやとあやとあや

素竹

胡也く又あやの胡もあや

其水

葉もあやとあやとあや

棠枝

家もあやとあやとあや

大竹

周和



成佛也存後身之真生の由也

殿部田

露白

吾後之福也何家をも

文和

吾後之福也何家をも

百之

吾後之福也何家をも

曳雅

吾後之福也何家をも

文橋

吾後之福也何家をも

圓志

吾後之福也何家をも

兔秀

吾後之福也何家をも

素仙

祭兄文

嗚呼悲哉家兄也其親友執家兄所好者以祭其靈敬之尉也安  
其神也兄其有知乎嗚呼悲哉兄蚤好風詠思樂閑靜居常澹  
泊心逐清景三春對花吟弄日永秋天望月詠發光影象意所趣  
克脫塵境維精維巧思藻必逞而括其文抑塞其穎才藝所託實  
賴德乘風流之表滑稽音之猛近遠之士一欣響音影接之際温厚自  
省言辭安定行止必較其發一詠有託以請借懇到去取只  
慙嗚呼悲哉逝者如斯終不可止起居流年忽不務思韓々色未  
及酬美鶴鶴原上空傷落葉嗚呼兄誨我以軌撫愛之功



不度其理今而弃我使衣被冷天命無常起滅恍爾魂散不復魄  
歸不起面顏無見聲效在耳背據梧者去何速適今奉愛者  
空望王風烟吐設無形神接凄然相像生平心思欲顛伊奠之  
設至誠之先水日篆氣氤氳涕淚連々嗚呼悲哉尚鄉食

涼の〜須思へハ早〜秋の〜

南総殿部田

兼壽庵素寂



批を〜と誰中〜行〜ん煉のお〜 寂阿孫 梅吉

舞の舞の神さう〜  
あひまをわ〜

即〜〜〜〜  
伊能

多の世れ〜  
芋人

つ〜〜〜  
研石

秋〜〜  
葵道

世の〜  
荷曉

あ〜〜  
曙山

西方〜  
里通

福〜  
志中



廣ふ世なりを去りて何れもなきのみ

舟哉

静考

わらわりの世なきつらりり秋のそ

杉曉

碑の影をせしむるをいふ

之仙

こゝろは似てもいふれや氣の籠

泉山

秋を憂へて四度ふ事此の心

圓水

秋乃夜に思ふを憂へて圓向に

青蘭

虫のつらさを知るを憂へて

花交

碑の影をせしむるをいふ

有曉

善哉と云ふや一語を種とて極む

文鳥

指書や座をへた後より

一東

草や木や一葉の落みゆく秋

泉明

侍と見れば高き思ふ事あり

花遊

さあつと遠くへいそいで

庫遊

いそいでいそいでいそいで

素榮



人々現立るの由を見しこと

あまふもあつてはうき

舟師の任道はたかき所

変りて和光の都なり

我々舟師不新しむるは

あつてはうき

三世

一雙

親より後、兄と我と宗と孝と勲と、これら五つは、

孤獨と来りて、富と徳と、これら二つは、大海の艦船と、

これら五つは、二枚の舟と、舟の舟と、舟の上は、

一海と、下は、舟の舟と、舟の上は、舟の上は、

舟の舟と、舟の上は、舟の上は、舟の上は、

舟の舟と、舟の上は、舟の上は、舟の上は、

舟の舟と、舟の上は、舟の上は、舟の上は、

舟の舟と、舟の上は、舟の上は、舟の上は、







四季吟

春の部

無坊寂阿居士

年浪を破女とてを川景  
来ふ如く毒の冬官の都人

花を園と清き

試る雪やとく鳥の恩

白虎園の春世とてこれ

文其のり取活かしく一重く  
夕月や種心と神

一理万道

一輪の美の夜も也福壽外  
夕月とがく一傷く日并一粥  
あまもや松明振る中りと年人  
く川東の居や海を苦の海  
空もくふ無常事や口新の海  
空もや海も水能く空もく  
くくくくくくくくくくく  
梅の海も空もくくくくく







枝折てあゝ船をこりたるの枝

松壽はうしのあまの樹を

雨うらうらうの能く友也梅帝

月光少き

ふらふらとまきつらん風お目のまき

鹿島法師

るよの山家や新代のはれまの羅

既碑判を技家小

十うへくれをのそゝめや深草

娘七又うゝ死云

持ふのこやせうしきまきかきし

青木村宗二の墓小指

まゝとちのちとちとちとちとちとちとち

昔も夢也誰か言ふしとちとちとちとち

水を其下りおとやまのゆき

暖き思ひぬらうしとちとちとちとち

ちとちとちとちとちとちとちとちとち

梅柳うゝ月顔と是かたれ



鳥追つて了草履の来しぬりよきと  
魚腹と癖と抱えぬ維子に那  
白布の小蚕よりとくり利事  
隣り抱え度家や其の指  
星の端負をさくし脚くち利  
い〜一也おられさぬ娘馬  
智の世や所〜お年共集  
四月やあつた忘れし時句雲  
初午や玉姓流し〜い〜

松も若ら妻女悔らるれば

思ふも捨て誰か〜ふらん言の能  
子の膳ふ追つ娘の〜也来り能

楚挑の二月忌

候〜も空や雪を花乃下〜も来  
塊〜も寄〜も結〜も小あ〜も  
堪〜も夕〜も〜も鄙〜も

斗明亭新室

ま〜も乃〜もあ〜も〜も庄〜も〜も



池子七十の賀

十三

七虎の標下り標馬一雪を巻ふ

戸田新河亭より寄る一巻を巻けし  
りてきたり

おろる舟也舟送いけりハ梅の葉

日ト水も家一

松一十二月の山をさるおと

日あるまきう道西

ほくくくくくおれらるまのこ

おろる舟をさるの津波あり

さ蟹のまおろく柳の飛

使を鳥のむくくくく柳の

通一矢よ一りくく柳の

孫や子の見らるまきとくく柳

胡蝶を柳のむくくくく柳

何事もおれり別くくく柳

主人の標あつてくくく柳

標のの泊みくくくく柳

遠所小候くくく柳の

十四







まゆみく 不流流能りし 春の風  
まゆみくをぬきききき月のせひ也  
多角女々春のいと 福や 刺 踏  
水浴と 春のり 物ふ 信う 那

旅行

松屋より ぬくも 久し 山り ぬくも

富田 錦江 亭より

まゆみく ぬきききき 湖水の 波の 音

滑川 観音法衣

恒河沙の 雲の 空を ぎらぎら  
まゆみく 春の 風 吹く 山さき  
まゆみく 桜上 空を 吹く 山さき  
まゆみく 白の 何く 深し 山さき  
まゆみく 浅漬 軒 空を 吹く 山さき  
空梅也 乳房 翳し 空を 吹く 山さき  
夕空や 春の 風 吹く 山さき  
まゆみく 春の 風 吹く 山さき  
富田より 流るる 水 山さき



虎六女日記

力やろ志〜ぬ〜ひやるの奥  
うねの後ねのふ突あき涙〜ぬ

當年之指七十賀

子のり中や歳廿ろ緑も満るを

こゝろ坊う花も園といふら

兼さへつ 翹と見えちよと舞〜を花

中〜のまをりとか〜け仕とら

う〜と舞〜と志がりのふ〜よまの丁









雲水入の

まことおもむき寝るを女友かしくこころ

病中

とく月又待とのふし 玉宗靴を  
あはれきつてふかしくあつたを  
蜀籠あつたふかしく玉沖の波  
けつる面多き青 都を  
保つてふかしく山のふかしく  
何なるおもむき早 女をこころ

たつたつて後後とあつて保つて  
あつたつて深山隠れつて毎の  
杜宇 徒らきつてあつて  
あつたつてあつたつてあつて  
あつたつてあつたつてあつたつて  
あつたつてあつたつてあつたつて  
あつたつてあつたつてあつたつて  
あつたつてあつたつてあつたつて  
あつたつてあつたつてあつたつて  
あつたつてあつたつてあつたつて  
あつたつてあつたつてあつたつて







夕顔や花を向ふう家も  
いあつる月おち後三雨あてし  
夕鳥もさきり秋きり思ひ  
嘯——と病もやまのや月長  
つれぬる情さうりさ月の月  
夜——の氷もと別——と

上福田牛頭天王

も——とや小繩ちりり帯の音  
児連もさきり——さきりやいよ

あゆみ川越つ具る涼は

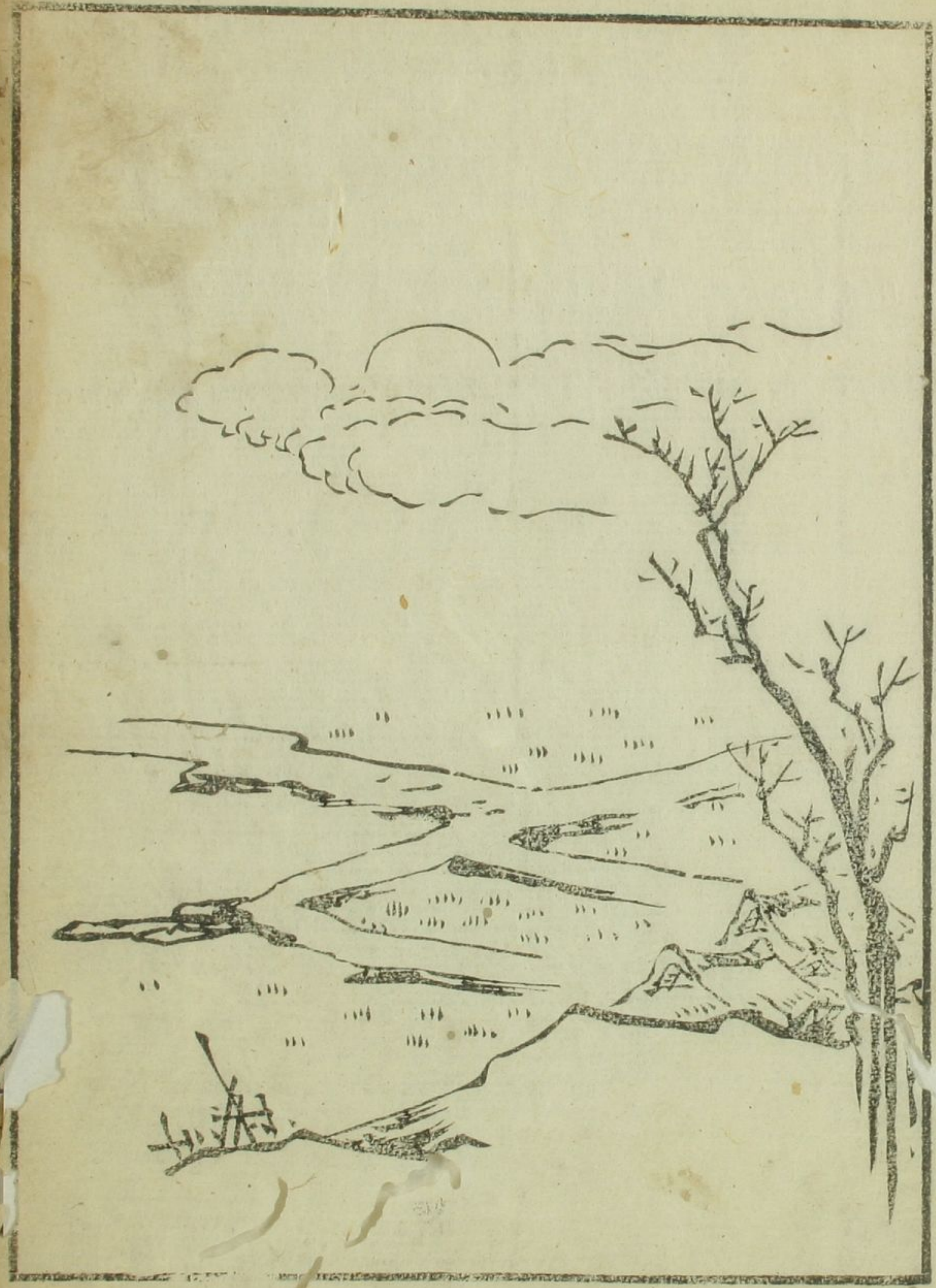
舟越連入河

七人の友揃りさきり——井

兜仙亭新宅小

さ——とや柱とよ家ゆの柳  
さ——まらや若くは木の葉  
を顔やつり——東も後の風  
さ——とやは——と交り  
初るの月や下舟もと渡り昔





吾も亦も雨のまじり  
夕もや雨も白く石の  
咲りや深きま雨のまじり  
暑き日こころの静けさ  
水邊を見てもふも暑の那



秋の部

喜夜不寐をさるりふりぬ  
杖持をさるり油きつりと秋  
唐桑不立登りけり今朝の味  
秋を月也小船さるり最上川  
を船り秋をいぬ所て舟り  
心のくし出らふとこの初月秋  
朝のほを油はくさぬと角は  
糸色る暖也地牛ら角のと

旁をれて桐の実をよふふ  
撞る家ちりくむの夕部を  
夕暮を招く日と得る舟り  
船りく連志つし海をさるり  
鴨焼を夕暮酒焼く男の舟  
さるりやふ人の心と船り  
暖くさるり船頭柱は噴出  
漁取の油流るり舟り  
夢をさるり舟り人の心



十三  
三の屋敷中一も崇むも草のま  
濃うみ柴胡を照へて葉を  
船板乃壺系引くや  
鶏頭や河清ふまをよみ  
解ききるはきむの降るもよ  
雨のむやこのも海に忠のま  
下系也夜ぬる後のむのま  
虫撥るる鳴るる草の成り  
とくくはね園に飛り来る虫の發

大原也車とて一も  
きりくは我とて之も  
蟻蜂庫裡の雲を  
来りくは葉を  
隠輝 測くとも  
早福とてくは  
まゆみ代節や  
城了れは  
まゆみ代節や



狎下遊吾

魂来也盃園を徑りくわりく  
釣柿の蠅の夜を海く鴨が  
鹿追りて愛女の逢はる佳の那  
寐轉て月もさしと安女と  
明行や本は向きの之辰の麻  
とさくく秋の氷いくまの  
友を柿をく友さくく也長と  
一とつと蠅はさくく鄰の家

六月の暮の霞をぬぐの  
戸のふたぬぐの浅く小舟  
舟の山もみもみ山のも  
舟の山もみもみ山のも  
秋の暮の霞をぬぐの  
ふくくの人を長巻を秋の暮  
秋の暮の霞をぬぐの



山崎の峰を眺むる秋の暮  
くさくさははれの雲の影を  
照れられ草橋のつたれふ  
阿きの白や吹雪ふまへし

舟旅熊野宮

舟のつらき月やわづらひの  
影漏るる雲の影を照れ  
浮世の品はあつた月見は  
名月や権の長さを月見

名月や卒の暮れはゆけむ  
りの月あひ静めし雲の影  
名月やと暮るる月の影  
過ぎたれまはるる月の影  
名月やうらなひの影を照  
るる影を照るる月の影  
山の庵月見の影を照る  
名月や橋を月見の西風を  
吹くるやまの影を照る



名月や花子一人琵琶の宮  
長きこと長きことし五月乃月  
秋の種や美の中一けくみのる

秋兔光輝

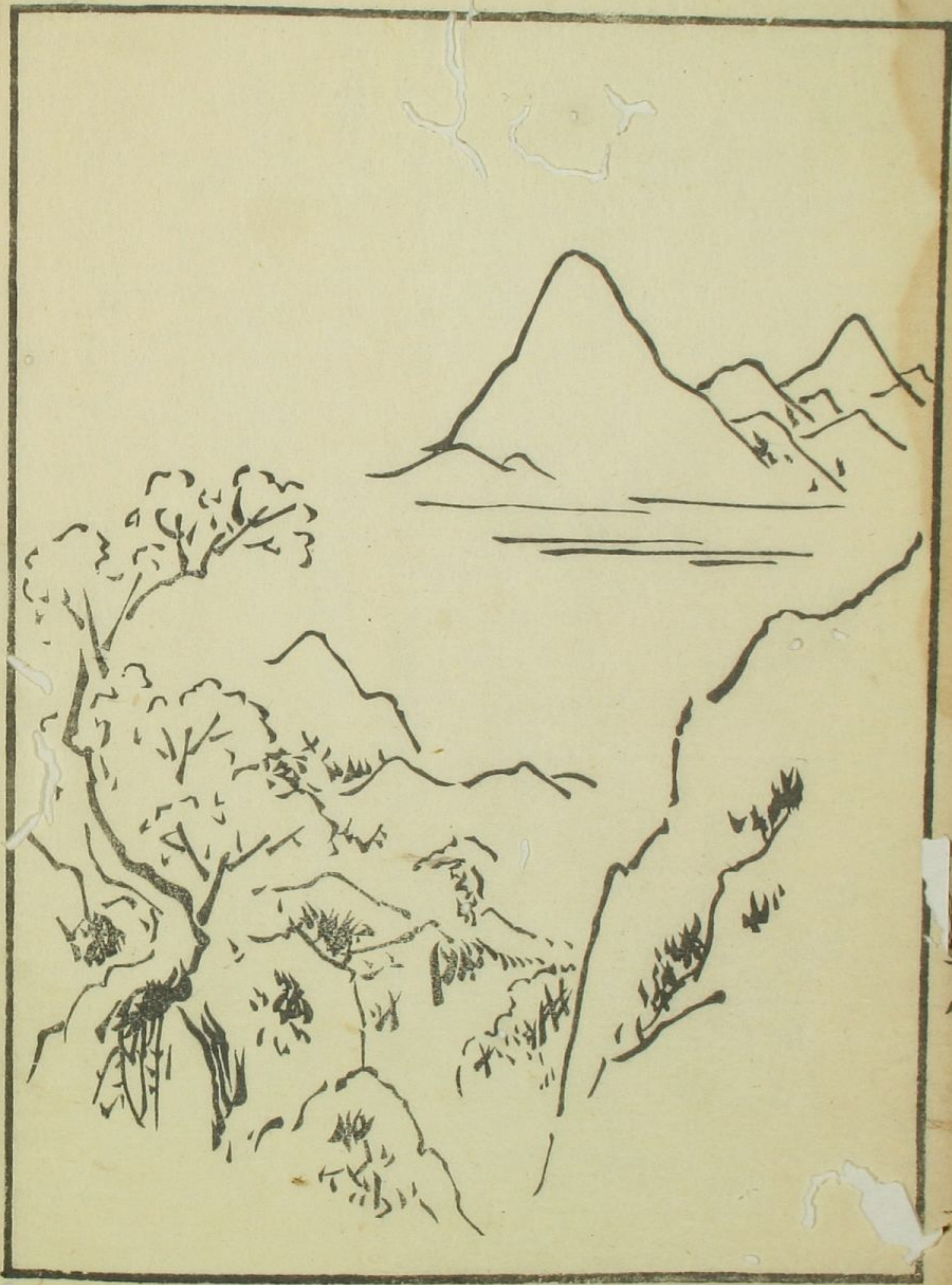
いづれも月のか幸の宮人  
なきか寝て夜をのりて  
夕風やゆきも活くわく  
恙なくもよあめ家おき  
梓慶不市人なりや村の心

望道や燈吹人より遠い  
猶うむく海や葉の主  
菊提て向る月まられ  
さく咲くもつとく  
十月の宗音こころ  
管吹くも夕暮る人  
名月や花子一人  
こころ園や思ひの  
秋の種や美の中一









冬の部

冬川ありや 祐物の芥の浅き  
 少き物や ぬらりし 屋敷に  
 引きよみ 柳のしるし 少き外  
 船の人おとよ ぬらりし 柳  
 我 高き 柳のしるし 柳  
 後 文根や 柳のしるし 柳  
 水とら 河の浅き 柳のしるし  
 橋 橋む 柳のしるし 柳



暮りゆく日や影暮らる人小夜多可白  
時雨もや寒貴分綿惚も  
猿人とも多し是もいんあしこれ  
帰しるも暖や下り後年  
梨の花ははらばら 寝てゆらり  
能く向ひしを断極やうらま  
人ふきくやもぬ紫おとゆら  
山嶽や口影おち後年帰ら花  
木深穢く志賀の阪やうらま

解屋もこももぬら、何の  
は師の存も流るる年はゆら  
峰も飛もあまの極もくもり  
山茶の花や再事表もいんあし  
茶ののさや年のつたれは海も峰  
るははのこもも向極もくもり  
垣も早もは秋折も風も向のまも那  
水もももあまき人流る海井も  
お夜下りて四割もるの神も



と水と輝く雪の落葉の時  
氷の如き氷をきく  
砂川や氷を氷が群の湖  
と月や雪や氷の石の流るる  
雪の如き人里の雪の指の如  
雪の如き雪の動るる  
雪の如き雪の流るる  
雪の如き雪の流るる  
雪の如き雪の流るる

小東千ききり  
こいり  
や日乃雪乃方ハ水の如き

左系信一北が師

楓の如き雪の如き  
雪の如き雪の如き

雪津の如き雪の如き  
一掃ふる雪の如き  
雪の如き雪の如き  
雪の如き雪の如き  
雪の如き雪の如き







夜何し〜吹流されたる月の  
於鶯のさる屋不意〜をれは  
をる舟人如く色も見えず地  
梅の月あま〜原をさるる  
こころも先按自の国見の如  
〜もあま〜も折る鶯  
〜も自ふる也師をの胡月  
〜もあ〜も名解らぬ  
まは〜もあ〜も痛れぬ也如桂

伯父の身は〜

春夕の露の乾く月夜

東武

東口

春夕の露の乾く月夜

宗周

東河坊士六下流の能書あり〜  
〜もあま〜も折る鶯  
〜も自ふる也師をの胡月  
〜もあ〜も名解らぬ  
まは〜もあ〜も痛れぬ也如桂

春夕の露の乾く月夜

杉露

春夕の露の乾く月夜

木食

台月

春夕の露の乾く月夜

汝橋

春夕の露の乾く月夜

雲鳥



藤又種了菴山がしうくも中を原

宗尺

給書やこれ明らふも不入る

白壽

阿れ世と菊志もあや液りも

兔道

いし入をといハ夕都のこるあつ角

津々

秋のきゆ又見しもや西明り

一雅

夜ふりし一葉も今も昔のま

芝丈

ときしつらハ風とあましむ候ふ

竹二坊

まをぬくは殿と牡丹の夕都

玉貫

雲帝も海も海 月秋

故六

月中より一葉も今も昔のま

一阿

飛鳥の羽は音はしり秋のま

一鳳

ふゆりしあひしものあま

理玉

○ 本

標之くもその系種よ秋の月

風松

こゆるや指もりぬれぬれを

芳洲

蓮の葉もあまむしれあまも海

月人

もろもろして給書の氣もはる

漁文

月しけのふふも一秋の風

風琴



家内若上世とてくして百ヶ日とてふ

宿身よりわらわら

定い火や真身子達ののちれ何

寥和

るんぬら外年何世の御名とていひまひけふ

を多此を白うらうらうー思ひまやから戀

みとまふ胸つぬれて三ーまふまふい

てふ

袖うけけし一さあは穢く河の姫

白共

むらーさう百重や爪の爪の馬

國甫

ふお痛し心啼きとを思ふ女

挑隣

あふーのうまをぬえ又して秋の果

以足

はくそ山拾ふ秋とせわの心

野逸

石拍念仲一なふの姿とて何の那

宇呂

後いよめく使つと終て秋の夜

完来

病の玉扇の虫月や屋のう前

白麻

見し一前を思ひつ青れんをふ

作笠

秋の若くはぬおの姿あもふ

梅人



に霞をなすれりしり秋と

宗守

蓮の葉の成りし候はるる

竹道

近しぬ藤の葉のりしに花をさすて文をよみ  
合書ありてあやかしは蓮華の葉のりし

海と山とを流るる美しき水

風葉

去年の冬に牡丹の園を極とてし  
けはに懸柳の一枝とてし

似たりし侍見ゆしとて

不門

昔新まゝ思ふに侍りしとて  
余りの古人の家の人と二世の  
佐の古誓りしとて侍の侍りし

夏を泉の空にハカリし  
下はあふる鳥をよみし  
の向に侍るは侍りしとて

侍りしとて侍りしとて

一長

南を侍の侍りしとて  
侍りしとて侍りしとて

水府

侍りしとて侍りしとて

直向

侍りしとて侍りしとて

風化

侍りしとて侍りしとて

東瀛

侍りしとて侍りしとて

水











